

江東の名所 ②

富岡八幡宮・永代寺と深川三十三間堂

江東区深川江戸資料館



「二軒茶屋雪中遊宴之図」(『江戸名所図会』) 深川江戸資料館蔵

永代島の八幡宮

江戸時代初頭、深川地域で最初の村が開発されたのが慶長元年(1596)のことでした。この深川村の南の海岸線に沿って小名木川が開鑿され、それより南のほとんどがまだ海岸の湿地帯だったころ、隅田川河口の洲で、永代島とよばれていた小島に、ひとりの僧がやってきました。その僧、長盛が八幡の神像を祀って造った小さな祠が、富岡八幡宮の始まりと伝えられています。寛永元年(1624)のことです。同4年、長盛は、幕府より永代島を賜ったと伝えられ、その年、永代寺が富岡八幡宮を管理する寺として創建されました。

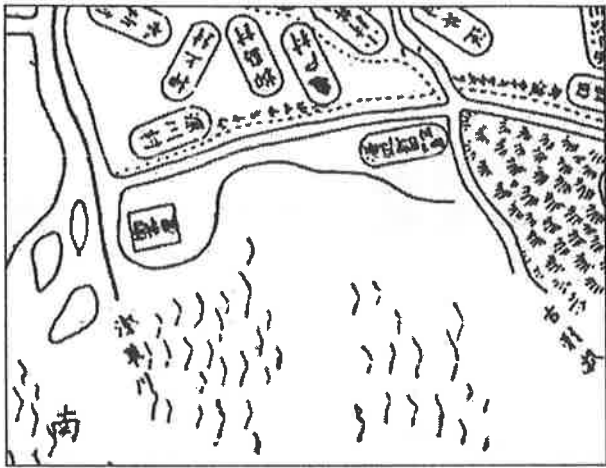
深川に、まさに最初の開発の槌音が響き始めた時期のことでした。

盛り場としての門前町の形成

その約20年後の様子を示す『正保年中改定図』では、

浅草川(隅田川)東岸に深川村と記され、その南に「ウナキサヤホリ」がみえます。これが小名木川で、小名木川南岸の隅田川近くに「御茶屋」とあるのがみえます。この付近のまるく海中にでているのが永代島を原形としてできた八幡周辺の陸地でしょう。「御茶屋」は、富岡八幡・永代寺の創建後まもなく周りに建ち始めた葭簀張りの茶屋や、その後八幡前の道を挟んで両側に建てられたといわれる板葺きの茶屋などであると思われます。

永代寺の創建から50年を経て、延宝から天和(1673-83)頃にかかれた『紫の一本』(戸田茂睡著)の永代島八幡の項をみてみましょう。そこには、「島の内繁盛すべからずとて、御慈悲を以って御法度ゆるやかなれば」、茶屋には容姿のすぐれた女性がたくさんいて、たとえようもないほど風流であった、というふうにかかれています。『深川区史』によれば、この女性たちの間に醸成された気質「なさけ」と「きゃん」が、独特



正保年中改定図<部分> (『新編武蔵風土記稿』所収) 雄山閣出版より

の深川情緒を生み出して行く素となつたとしています。寺社の参詣に付加価値を与えるため、飲食店や遊興施設の出店が許可される条件は、ほかの土地よりゆるやかであったとされ、これらを背景に、盛り場として多に発展したことがわかります。

三十三間堂の深川移転

江戸三十三間堂は、寛永19年(1642)に浅草に創建されました。京都東山の三十三間堂にならって建てられた通し矢の行事と弓術稽古の場でした。元禄11年(1698)火災で焼失し、同14年に深川に再建されました。堂守の堺屋久右衛門は、幕府より、堂前に商人を

住まわせて地代を徴収し、堂の保守の経費の一部とすることを認められました。これが深川三十三間堂町の始まりといわれます。

三十三間堂で行なわれた「通し矢」の競技は、京都の記録保持者を「天下第一」、深川の記録保持者を「江戸一」とよぶ慣わしであったと伝えられます。

三十三間堂も、競技や観戦に集まる武士や堂前の商人たちで賑わい、盛り場としての活況を呈していたことが想像できるでしょう。

深川三十三間堂は、享保15年(1730)の大風雨をはじめとして、何度か潰れたり破損したりして建て直しが繰り返されましたが、明治5年(1872)に、その姿を消しました。

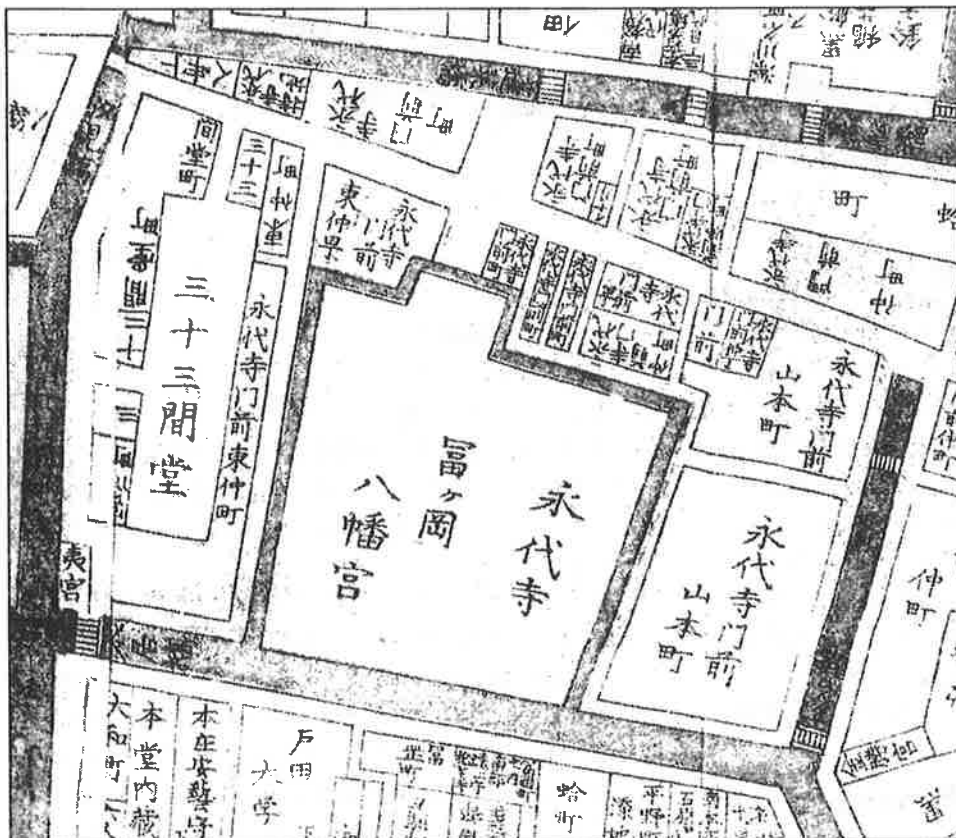
深川のにぎわい

江戸時代半ばを過ぎると、江戸生まれの豪商や有力町人による、江戸固有の文化が展開します。名所めぐり、外食などの流行はその好例です。これらはやがて、豪商のみならず庶民の間にも広まっていきます。宝暦から天明(1781-1788)にかけてのこの時期、富岡八幡宮、永代寺を中心として栄えた深川は、江戸東郊の行楽地として大いに注目されるようになっていきます。境内では、勸進相撲、見世物などが行なわれ、永代寺の弘法大師御影供や、「山開き」とよぶ庭園の公開などが人気を集めました。また、出開帳も盛んに行われました。

富岡八幡宮前にあった「松本」と「伊勢屋」をさす「二軒茶屋」は、元文(1736-40)のころから、凝った建て物や食器と、高級料理で有名でした。天保7年(1836)刊行『江戸名所図会』に、「二軒茶屋雪中遊宴之図」として、冬景色が紹介されています。

また、土橋の平清は、文化(1804-1818)の頃はやりだした料理茶屋で、明治39年(1906)まで100年近く名物の料理屋としてその名を馳せていたことが知られています。深川は、最高級の料理屋から、庶民の味まで幅広く存在する奥深い土地でした。

文化文政期をピークに興隆した江戸庶民文化は、浅草と並び深川の地で大きく開花したということができるよう。その中心が、富岡八幡宮と永代寺であったといえます。



嘉永4年『本所猿江龜戸村辺絵図』(『江東区史』所収)